



# オクトーバーレイン 2

---

暑い午後のお茶

---

にしのまさみ

---

1. [本文1](#)

オクトーバーレイン

暑い午後のお茶

にしのみさみ

七月も半ばになると日差しも強く暑さも本格的になってきます。  
午後ともなればそれは激しく煉瓦造りの道を焼き始め、外を歩く人道理もまばらになるのです。かといってこの時期の観光客が減るわけでも無く、店では日差しよけの parasol を立てたり木陰にテーブル席を設けたりと、それなりの努力をするわけで、店員は店とテーブル席との間を往復することになります、  
「お待たせいたしました。アイスカフェラテが二つでしたね」  
シオンは木陰のテーブル席に飲み物を置いてからクレジットシートを置き  
「どうぞごゆっくり」、  
そう言ってテーブルを離れようとする、  
「お嬢さん幾つ」  
と何時ものように尋ねられるのです。  
「十四になります」  
それに対して正直に答えるのは、根っからの真面目さによるものか分からないのですが、おかげで、  
「そう、おうちの手伝いも大変ね」  
と同情の言葉をかけられることしばしばなのです。それについて本人は、別に気にもとめること無く、  
「楽しいでから」  
そう笑顔で答えるのですから、多くの客の心を驚つかみするのです。  
それに、容姿が良く、  
「貴方の髪って綺麗ね、日差しでキラキラ輝いてる」  
と言わせるくらいの輝く銀髪によく見ないと分からないオッドアイをしている。それは、右が空のように碧く左が輝く草原のように碧い瞳は、彼女の印象をミステリアスなものとしているのですが、あどけない無い表情はそれを弱めているのです。  
だから、この様に話す客も、  
「綺麗なお嬢さん、一緒に映ってくれませんか」  
と声を掛けられるのも、しばしばですが、本人は綺麗とか思って無く、いえその様なことにまったく関心が無く、  
「失礼ですが、その様なことはお断りしています」  
と丁重に断るのです。  
けれど、その様に断っても、本来の物腰の柔らかさで憤慨する客は皆無なのです。  
さて、このシオンが関心を持っていることと言えば、宇宙船の免許を取ることでした。  
ただ、おいそれと取れる資格ではありません。  
それには、最低飛行時間を満たさねばなりません。ええっと、何時間だっけ。  
あつ、そうそう大気圏内外を問わず全三百時間の条件が先ずあります。  
あと、ペーパーテストに、実地試験にパスすれば晴れて合格なのですが、クラスを上げるためには、さらに条件が厳しくなるのです。  
ちなみに、今彼女が持っている資格はスループで、スクーターを目指しています。これには最低年齢と学歴があり、シオンはこれをまだ満たしていないのです。  
「何してるの、アン」。  
シオンはわたしに近づいてきて、尋ねるのです。  
「リハビリでここに来てみたの」。  
わたしは、お店ひさしの陰にあるテーブルで休んでいるところを彼女に見つかって、そう答えました。

「そう、調子は良いの」。

そう尋ねながら、シヨンはわたしの向かいに座ってわたしの右手を軽く握るのでした。

「大丈夫そうね。今日は震えていないわ」。

そう言って、わたしの腕を放して、

「何か飲む、のど、渴いたでしょう」

と言うのでした。

わたしとしてはその様なつもりは無かったのですが、

「では、レモネードを」

と答えてしまいました。じつは暑さとここまで歩くので、のどはからからだったのです。

「分かったわ。少し待っててね」。

そう彼女は、わたしに告げると店のカウンターに向かうのでした。

暫くすると、シヨンはレモネードを持ってきてくれましたが、どうやら忙しいらしく

「ごめんなさい。今、忙しくて休み取れないみたいなの」

と言って他のテーブルにまわるのでした。

彼女はわたしと同じ年齢なのに、既にこの様に働いていたのです。

それは、シヨン自身も話してくれたのですが、暫くお世話になった大学の先生の影響なのだそうです。

その日の夜に、彼女の伯父さんから連絡があり、伯母の所に明日何うようにとの話があったそうです。

その伯母様とは、オクトーバー学園の理事長なのだそうです。そして、シヨンが希望している宇宙船の資格についての提案があるから、ぜひ家に来るようにとの事だったそうです。

そして、その日も暑く午後の日差しは焼け付くようでした。

彼女は何時もなら自転車で移動するのですが、この日は何故か迎えの車が来たのだそうです。

じつは、この時点でシヨンはその周到さに不信感を覚えたそうです。

さて、理事長の住まいはノース市街地区の西の外れオクトーバー・ユニバーシティーの北にあるお屋敷です。シヨンのアパートからだとだいたい車で三十分ほどかかるそうです。どうしてかという学園の敷地内を通らなければならないからだそうです。

そして、この伯母様の名前はジェシカ・ウインストンというこの地方の名士なのです。

そして、彼女が着くなり熱烈な歓迎を受けたそうです。

「シヨン、元気だった。近頃こちらに顔を見せないから心配していたのよ」

と熱い抱擁とともにこの様に言われたそうです。

「お招きありがとうございます。名士の方々の寛ぎの時間にわたしのようなものを加えていただき感激しております」

この様に、やたら丁寧な言葉を使うときはシヨンは喜んでいないのでした。

そう、ハッキリ言って皮肉なのです。

それでも、居並ぶ名士を紹介される時には、嫌な顔をせず笑顔を振りまくのです。

こんな時は、容姿の良さに少しばかり感謝するのだそうですが、心の中では早く終われと念じているのだそうです。

それでも、何時ものお茶会で歓談しながら、紳士淑女の話の種にされ居心地の悪い思いを過ごすのです。

暫くして、伯母様が近づいてきて別室に招かれたのです。

「さあ、こちらに」

と招かれて入った、部屋には、二人の紳士が立っていたそうです。

シヨンは伯母様の紹介に応じて、その二人の紳士に儀礼的な挨拶を交わすのでした。

「では、皆さん此方の席に掛けていただきますか」。

と伯母様が促すと一同それぞれの席に着いた。

この時、シヨンは伯母様の隣に座ったそうです。

そして始めに向かって右側の紳士、宇宙船舶委員会の理事という肩書きで紹介されたワトソン氏が話したのです。

「ジェシカから話を聞いたときは驚いてたが、姪御さんがスクナーの資格が欲しいというのは冗談かと思った。それで、単刀直入に尋ねるが、その意志は本当かね」。

「はい」。

「そうか、君の記録を見せてもらったが、スループでの航行時間が十時間ほど足りない。それに、この国では規定の学歴以上無ければならないことも承知してるね」。

「はい」

そう答えながら、シオンは資格規定の航行時間に船種規定があることを始めて知ったのです。これは、規格下位の船種によると言う項目がスループだけを指していたことを示すもので、年齢が十四の彼女は、試験の説明会に参加できないのでそれを知らなかったのです。

「さて、学歴のことだが、義務教育の最後の三年が足りないのだ。これについては何処の学校に行くかは君自身が決めることとして、試験は筆記と実技、口頭試験がある。実際には十七歳になれば義務教育中でも受けられ、合格すれば卒業までは仮免許という事になる。卒業すれば晴れて免許交付となる。理解できたかな」。

「はい、分かりました」。

この時点で、シオンに分かったことは、伯母様が気を利かして彼女の年齢では聞くことが出来ない、試験に関する情報を得る機会を設けてくださったことだったのです。

「おっと、忘れるところだった。船種についてだがスループ以外にヨットでも大丈夫だ、ただし三人乗り以上の限定が付くがな」。

その言葉にシオンは良い情報をもたらえたと思い、

「ありがとうございます。詳しく話していただいて感謝いたします」

と正直に言ったのでした。

するとワトソン氏は肩の荷が下りたのか、

「昨日、突然うちの姪に会ってほしい、資料も送るから助言してもらえないかと、来たときにはビックリしたのだがね。資料を見せてもらったときに、よく噂に上るあの娘かと分かって、詳しく昨日一日を掛けて試験管連中に教えてもらったのだ。抜けてる事柄は無いと思う。今話さなかった事は、資格試験の要求項目に書かれていること同じだ。これでわたしが、呼ばれた用件は終わりですか、ジェシカ」。

「はい。ありがとうワトソン」。

「なに、幼なじみ同士気遣いは無用だ」。

ワトソン氏は笑みを湛えながら、これでおしまいというふうになさげに見えるよう身振りで示しながら答えたのでした。

その様子を見てシオンの伯母様が笑いながら

「あいかわらずなのね、昔から頼み事をやってくれた後はそんななさげない態度をするから、最初は怒ってるかなと思った時期もあったのよ」

と言うとワトソン氏は、気恥ずかしそうに、

「だから、ふられたのかな君に」

と笑いながら言うのでした。

すると彼女は事も無げに

「どうでしょう」

と言うだけだったそうです。

さて、この遣り取りで、ワトソン氏が招かれた用件は終わったようでした。

そこで、今度はもう一人の紳士、此方はスタイナー博士で学園高等部の学園長をしておられる方が、話を始めたのです。

「こんにちわお嬢さん、わたしは学園の高等部の学園長をやっております、スタイナーと申します。この度は理事長からの話もあり、直接お会いできればとはせ参じた次第です」。

そう告げるスタイナー氏の言葉を聞いてシオンは、要するにおまけか、と思ったそうです。そして、彼の話は続く、

「我が校はご存知のとおり、オクトーバー学園の高等部の一つノースハイスクールです。教科は国の指定道理に行われなすし、他国からの留学生、大学との合同教科も学べます。将来は船の船長になるのであれば学ぶ環境としては最適でしょう。大学とは隣り合わせですし、授業にはリアモノレールが便利に使えるはずで。午後の授業のカリキュラムは君の自由にすることも出来ますし、本来のカリキュラムを進めることも出来ます。あえて、その逆も申請によって可能です。これほどベストな環境は何処にもありません」。

「そう話すスタイナーは自信の学校の良さを宣伝するのでした。その様子はシヨンにとっては、学園の宣伝部長が罷り越してきたのでは、との錯覚を覚えさせました。そして、次の言葉に彼女はムツとしたのです。「それから、ノースとサウスでは制服が違います。国の規定で学生には保護の為に制服着用が要請されているのは、ご存知でしょう。登校の制服は勉学に支障が無いようシツクにまとめられています。貴方もご覧になった事があるでしょう。さすがに中等部の可愛らしさはありませんが、それでも学生に相応しいものとなっています」。

そう、この制服という言葉にシヨンは嫌な思いがした。別に制服がきらいなのでは無く、制服を着た後のことがいやなのです。それは彼女の伯父様、ファーナビー提督が制服マニアなのです。可愛い制服を見ると必ずシヨンに着せたがるので、彼女はそれ以来制服を見ると嫌な思いがよみがえるのです。そのため、提督の側を離れて知り合いの教授夫婦にお世話になった事があるほどだそうです。そして、此方に来てからも中等部の制服を着るのが嫌で、現在通信教育を受けてます。その理由は、公式には研究所に通っているため、事実上提督の制服フェチのため、とは書けませんので了承されているのだそうです。

そう考えたときです、シヨンはこの話の裏に提督の存在が介在しているのでは無いかと感ずるのでした。正解です。

どうやら、スクーナーの免許を餌に、学校に行かせるよう仕組み、彼女の制服姿の画像コレクションを増やそうと画策したようなのです。

そこで、まず免許を取るための規定を知らせ、学校の必要を認識させてから、学校の説明をして入学を促す、あざとい大人の罠が仕掛けられていたのです。

さてどうしたものか、とシヨンは考えました。そうしている最中もスタイナーの入学の勧めの話は続いていました。

そこで、彼女は不本意なのですが、「分かりました。伯母様の進められる入学をいたしましょう。ただし、伯父様やその部下、屋敷の者は、入学時に立ち入らないことで宜しいでしょうか」と言ったのです。

この言葉は伯母様の喜ぶところとなりまして、手を握って喜んだそうです。

そこに居合わせた二人に紳士もホッと胸をなで下ろすのでした。

それから、シヨンはそれぞれの紳士に、「為になる話を伺えて感謝します」そして「今後ともお世話になると思いますので、その時にはよろしくお願いします」と言ってから「では失礼させていただきます」と言って部屋から退散したのです。

そうしてからシヨンは、今回の招待がこのためであった事によく気がついたのです。どうりでドレスを着せられ車の迎えが着たのか不審だったが、このためであったのです。その後、伯母様が近づいて来て、

「少し、庭を散歩しませんか。二人っきりで」

と誘ったのです。

シヨンはそれに無言で応じたのです。

この日も暑く日差しはキツかったのですが、日が傾き少し冷たい風が心地よさを感じる時間になっていたので、伯母様は日陰のある場所に案内してそのベンチに席を取ったのでした。

伯母様は鈴を鳴らして、テーブルとお茶を運ばせ、シヨンに紅茶を勧めるのでした。

それから、こう言い始めたのです。

「今日、来てもらったのは、他にもないシヨン貴方とこうして時々お茶を飲めないものかしらと、思ったものだから、どう承諾していただけない」。

その言葉にシヨンは、

「今日のように人を貶めるようなことをしなければ考えても良いです」

と不機嫌そうに答えるのでした。

「そう、なら、今後はその様なことになら無いと約束します。いかがですか」。

「それなら、けっこうです」。

「そう、ではもう一つ、わたしの事はジェシカ伯母さんでいいわよ。伯母様はどうも堅苦しいですし、他の方と区別が付きませんし、シヨンになら伯母さんと呼ばれてもいいから」。

その言葉のとおり、

「では、ジェシカ伯母様、この度の事で色々とお世話になりました」

と意に反しながらも感謝を述べたのです。

「まあ、ありがとう」。

彼女の耳には最後のジェシカ伯母様の声が残っていました。勝者の余裕の言葉が、すでに夜の帷がかかっている町並みを車の窓越しに見ている自分の耳に響いていたのです。

それから、数日後のまた暑い午後、木陰のテーブルに飲み物を運んでるシヨンに、

「こんにちわ、可愛い店員さん」

と声をかける人物がいました。その人はジェシカ伯母様です。

するとシヨンは飲み物を運んでから、

「今日は、ジェシカ伯母様、どのようなご用件でしょうか」

と尋ねたのです。

「客で来たのだけれど、冷たいレモンティーをお願い出来るかしら、わたしはそこの空

いてるテーブルにいますから、おねがいね」。

そう言うなり空いてるパラソル付きのテーブルに席を取ったのです。

暫くして、レモンティーを運んで来たシヨンに、

「マスターには話を付けてあるの、少し此処に座って話を聞いてくれない」

と言ったのです。

「はい。先程マスターから伺いました」。

そう言ってシヨンは向かいの席に着いたのです。

「先ず、上の書類はお船の試験に関係する書類で、ある程度基準を満たしたのなら提出すると良いとワトソンが言ってたわ。詳しくは中に書いてあるそうよ。そして、その下にあるのが、うちの学園に関する資料、入学要項も書かれていて、これはごめんなさいね、編入試験を受けてもらう必要が出てきたの、普通は中等部進級試験がそれに当たるのだけれど、今受けてるの通信教育でしょう。だから、進級試験の代わりに編入試験が必要となったのだけれど、あなたなら大丈夫だから、心配しないで、簡単な筆記試験だから、身に付いた学力を見るだけだから、その試験日も書かれているわ。ノースハイで行われるから必ず来てね。といっても決心が付いてるのだから、いまさら嫌とは言わないでしょう」。

その言葉を聞きながらシヨンは書類を受け取り答えたのです。

「ありがとうございます。よく目を通させてもらいます」。

すると、ジェシカ伯母様は、

「たまには、こういうところも良いわね」。

と言いながらシヨンの顔色を覗いたのです。

それに気がついたのでしょうか、

「わたしの顔に何か」

と尋ねたのです。

それに答えてジェシカ伯母様は、懐かしそうな表情で、

「昔、こんな感じで教え子の悩みを聞いたことがあるの。その子も自分の将来の進むべき道に障害を抱えていたわ。今のあなたが抱えている問題よりさらに大きな問題を、でもねその子は先に進むことにしたの。あなたと同じように、周りからは反対されたけれど、希望を叶えるために進んだわ。そして叶えたの。自分の望みを叶えるのは努力が必要よ。わたしは、その手助け、いえちよつとしたお節介をしただけ。あとはシヨンあなた次第なの」

そう言ってレモンティーを飲んでから、

「今日も暑いわね、でも日が傾けば風は吹くのだから」

と言って飲み干すと、

「ごちそうさま。今度は学校でね」、

と言って帰って行ったのです。

それは、シヨンにとっては勝手に来て勝手に帰って行った様な感覚だったのですが、話された言葉に何か含むところがあるようで気になってしょうが無かったのです。

けれど、このまま障害に留まる気は無かったので、折角いただいた機会を有効にしなくてはと頂いた書類を持って帰り検討することにしたそうです。

さて、ここからは、その後の話になります。

一年後には、シヨンはノースハイに通うことになりました。それと同時に、スクーナ一の資格試験の願書を、規定時間満了と同時に提出したそうです。

此処までは本来の予定道理だったのですが、どうやら狐に一杯食わされた様なのです。

。シヨン曰く「あの人は狐だったですね。知りませんでした」というのです。その理由なのですが、学園長として来られていたスタイナー博士は大学の教授で物理学の教授の席が一つ空いているので、そのポストに相応しい人物を探していたそうです。ここで、間違わないように言っておきますが、ノースハイの学園長も兼務されていたそうです。そこに、宇宙船の星間航法の新しい理論とシステムを作った天才少女の話を聞き、つまりシヨンのことですが、是非、会ってみたいとの話をジェシカ伯母様つまり理事長に話して会うこととなったのです。それで、会ってどうやら気に入ったのでしょうか、編入試験とは名ばかりの教授採用試験及び面接にすり替えたのでした。その事について、後で、この国の中等部はあんな高度な物理や数学の論考が必要なんですかと言ったのです。

そんなわけで、晴れて高校生教授の誕生となったのです。

本人の意志とは関係なく、目の前に欲しいものをちらつかせ同意を得させる、やり方に嫌悪感を覚えますが、いろいろな特権と引き替えに承諾したそうです。

それも、ジェシカ伯母様の目論見の範疇だったのでしょうか。すんなり許可が下りたのです。

ただ、時々、シヨンは、わたしの前でだけ、

「大人にだまされた」

と愚痴をこぼす事があります。

やはり、狐の様な大人には注意でしょうか、それと、暑い日の午後のお茶の誘いも、

おわり